

## この夏決めた

大口高等学校 二年 山下 結愛

「神様。」

私の母は訪問看護師だ。訪問看護師の仕事は、赤ちゃんからお年寄りまで全ての方が自分らしく、在宅生活が送れるように、かかりつけの医師の判断に基づき、看護師がご自宅に訪問し、支援するものだ。自分が育った場所、家族と住んできた場所、たくさんの思い出がつまっている自宅で最期を迎えたいという利用者さんの希望を叶えるのも訪問看護師の役割なのだ。

私は長期休暇に母の仕事についていく機会を設けさせてもらった。肺の疾患をもった九十七歳の男性。ベッドに横になっていて、自分一人では、横になることも座ることも難しく身動き困難な状態だ。母は利用者さんの家に入る前大きな声で挨拶をした。少しびっくりしたが、笑顔で明るくて誰もが元気をもらう声だった。利用者さんの奥様がいらっしゃって、「どうぞ。」とおっしゃった。しかし、奥様はきつそうに顔を伏せていて、声にも元気がなかった。すると母は、「大丈夫、ご飯食べれた？」と声をかけたのだ。利用者さんだけでなく、利用者さんの奥様にも気を配っていた。「食べたよ、ありがとう。」と。母の気配り、流石だと思った。大きな声も、耳が遠いための気配りでもあった。母は、薬を飲んだか、便が出たか、夜眠れたかなどまで聞いていた。水分やご飯が少ない時は、栄養ジュースを飲んでもらい、便が出なかった時は下剤を飲むよう助言しているそう。この利用者さんは、

母が前違う訪問看護ステーションで働いていた時の利用者さんでもあった。

母はそこをやめて今、「訪問看護ステーション結愛」を運営している。利用者さんの奥様は、母がやめたことを知り、母の看護でなきゃだめだと、母を探し続け見つけてくださり、「訪問看護ステーション結愛」にすぐ移動して下さったのだ。看護が始まるとすぐ、利用者さんは母に「来てくれてありがとう。」と言った。「今からだよ。」と優しく声をかけながら熱、脈拍、血圧、酸素濃度、呼吸数を測っていた。脈拍は、機械がだすものでなく、時計の秒針を使い、自分の手で脈を感じリズムを見ていた。一人では身動き困難なため、クッションなどを使って利用者さんがきつくない体勢で支援を始めた。服を脱がせる際、利用者さんが痛くないようゆっくり利用者さんのペースに合わせサポート。体を拭く時、火傷をしないよう、冷えすぎないように、自分の腕の部分で温度を確認し、適切な温度でタオルを濡らし優しく丁寧に拭いていた。私は乾拭きや体を抑える部分を手伝わせてもらった。見ているだけでは分からない触って感じるものがあつた。細く触れることが不安になる気持ちもあつたが、触れることで目で見ただけでは分からない生きる力を感じる事が出来た。ずっと同じ体勢だとどうしてもできてしまう床ずれ、支援レベル上毎日行くことができないため、その場に応じた適切な治療。足の指の間までしっかり拭き、服を着させた。自分で手を通し頭を潜らせた。利用者さんのペースにあわせサポートをしていく。自分で身動き困難なため、ベッドの少しのシワ、服がたまっていると気になっても自分では

直せず、不快感を感じてしまう。母はシワ一つ残さず支援を終わらせた。最後に母は「あんべが悪いところはないですか。」と聞くと利用者さんは笑顔で「ないです、どうもありがとう。」と答えた。帰り際、母が「またくるね。」と伝えると「ありがとう気をつけてね。」と言っていた。私にも「ありがとう。」と目を見て伝えてくれた。

尿の管を入れて生活をしている九十五歳の男性。支えがあれば一人で行動できるが、尿をだすときにこぼしてしまうこともある。この利用者さんが、私に言った、「お母さんに出会えてよかった、いつもありがとう、お母さんは本当に神様だ。」と。その言葉を聞いてうれしさがこみあげてきた。大変な生活を送っている中、母の思いが伝わっていることがうれしくてたまらなかった。

私は母の姿を見て、こんなにも尊敬できる人はいないと思う。母の支援はとても愛があり、自分でできるところは自分でさせ、できないところを補いできることを減らさない支援。実際に自分も経験してみても、利用者さんからの声を直接聞き、母の偉大さを改めて感じた。訪問看護師の仕事は、大変で誰でもできる仕事ではない。だが、この仕事はこの先もっと必要になる仕事だ。私は今まで自分のしたいことを探していたがこの夏決めた。私も母と同じような仕事をしたい。そしていつか一緒に働きたい。